



海老沼小だより

～かしこく やさしく たくましく生き抜く子
笑顔と歌声あふれる学校～

8・9月号

令和4年8月26日

さいたま市立海老沼小学校



2学期が 始まりました

校長 大島 恵美

夏休みも終わり、閑散としていた学校に子どもたちの明るい笑顔と元気な歓声が戻ってきました。どの子どもも、普段ではできない特別な経験を積み、ひと回り大きく成長した姿を見せてくれています。夏休み中は、保護者、地域の皆様が子どもたちを見守ってくださり、ありがとうございました。おかげ様で子どもたちは無事に2学期を迎えることができました。

今夏も、先日「異常気象だった」と報道がありました。事を行うにしても体調面の十分な配慮が欠かせない猛暑の日が多い夏でした。35℃以上の日を「猛暑日」という言い方も2007年より使われ始めたと言いますが、使われ始めた15年前と比べ、猛暑日が増えてきている点からも、より暑くなってきたことを実感します。

そんな中、朝夕吹く風の中に虫の声も聞かれ始め、ほんの少しだけ秋の空気を感じるようにもなりました。まだまだ残暑厳しい毎日ですが、季節は確実に進んでいるようです。

コロナ禍3年目の夏、久しぶりに行動制限の無い夏休みでしたが、第7波が猛威を振るい、各地で「1日の感染者数」が更新されました。その中、私は、3年ぶりに主人の実家に帰ることになりました。(父母が二人とも手術をすることになったからです。)

実家は「渋沢栄一」の生家の並びにあり、また、栄一の従兄弟で後に富岡製糸工場の初代工場長となった、「尾高 惇忠 (じゅんちゅう)」の家の近くです。

3年ぶりに見る隣家は、もともと市指定の文化財だったのですが、さらに立派な駐車場や看板ができていました。大河ドラマに取り上げられたことで、渋沢栄一の偉業が改めて認められ、環境が整えられたそうです。

深谷市民にとって、渋沢栄一や尾高惇忠は子どものころから身近な、そして大切な偉人だったそうです。栄一は『論語と算盤』という名著を残しますが、その『論語』を学んだのは、「尾高塾」、尾高惇忠が家で開いた学校でした。その「尾高塾」で「読書は読みたいと思ったもの、面白そうだったものから読むのがよい」と当時から自由な教育方針を示していたそうです。尾高惇忠の生涯やその影響力を見ていると、教育の大切さが身に染みて伝わってきます。

さて、2学期は期間が長く、学習に加え、多くの行事に取り組み、力をつけることができる充実の学期です。一人ひとりが目標を明確に定め、自己実現を積み重ね、楽しい学校生活を送ることができるよう教育活動を進めて参ります。また、子どもたちとともに、『読書』にも親しんでいきたいと考えています。

新型コロナウイルス感染症の状況を注視しながら進めることとなりますが、今学期も保護者の皆様、地域の皆様のご理解とご協力をお願いいたします。